

京都大学	博士（文学）	氏名	渡部 和隆
論文題目	内村鑑三のキリスト教思想		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本研究の目的は神認識から救済論に至る内村鑑三の思想世界の全体を神学的認識論の観点から解明することである。近代以降の組織神学の方法論は、「経験」の媒介の問題を避けて通ることができず、一般に、認識論的な方法の問題が大きな比重を占めている。近代日本で活動した内村鑑三においても、キリスト教は「実験」によって理解できるという経験主義的なテーゼがしばしば主張されており、そこに神学的認識論の問題を確認することができる。さらに神認識に関しては、内村の場合、「仰瞻」という独特の用語が使われることにも注目しなければならない。内村は十字架を仰ぎ瞻ることによって救われると主張する。内村においては、神を認識することがそのまま救済へとつながっていくのである。本研究では、内村のキリスト教思想を神学的認識論の観点から分析し、神認識から救済に至るまでの内村の論を明らかにすることが目指された。</p> <p>内村研究は先行研究が多く、神認識に関しても内村の「実験」概念や「仰瞻」概念について研究がなされている。本研究では、まず序において内村研究の状況を概観した後、神認識をめぐる先行研究を整理し、以下の問題を課題として取り出した。</p> <p>（１）「天然」「歴史」「実験」を通しての神認識はいかにしてもたらされるのか。</p> <p>（２）「今」における「既に」「未だ」という時間構造をもつ「十字架の事実」はどのような思想がその背後にあることによって可能となるのか。</p> <p>（３）義認は「仰瞻」を介することでいかにして聖化や栄化とつながっていくのか。</p> <p>（４）「仰瞻」のような神認識の途上性・未完性とはどのようなものなのか。</p> <p>本研究はこれらの四つの問いに答えることによって神認識から救済論までの解明を目指した。</p> <p>では、どのような成果が得られたのか。論文全体の構成は、第一部と第二部とに分かれ、第一部は第一章と第二章、第二部は第三章から第六章までとなっており、最後に終章で結論を述べる。まず、第一部では（１）の問いに答えるため、内村の哲学的認識論の枠組みを論じた。第一章ではその問いに答えるため、内村の経験主義的な枠組みをイギリス経験論の哲学、特にヒュームの哲学と比較することを通して分析した。その結果、内村においてもヒュームにおいても、真偽をテストされるべき仮説に対して、経験的事実性が重視されており、経験的に自我に与えられる「事実」は人間が構築したものではなく、むしろ自我の外に確かに実在するものとされている。ただし、内村の場合、「実験」は信仰の基礎となるため、「全有whole being」による検</p>			

証が主張される。すなわち、内村の「実験」は、ヒュームの場合とは異なり、「詩的観念」のような余剰が含まれていたのである。

第二章では同じ問題を「形而上学」という別の切り口から分析した。その結果、経験を超えた形而上学的対象に関して、それが人間の経験のうちにあられわれ人間によって経験されうるという意味で「形而上的経験」と言いうる、とする考え方が内村に存在することが判明した。内村にとって、人間は「形而上」の实在を経験することが可能なのである。このことは特に内村の sacrament 論を分析することにより明らかとなった。内村の想定する「形而上」の实在は sacrament という「表号」を介することで経験可能な存在になる。「天然」の世界のあらゆる被造物が「形而上」の实在の「表号」(Symbol) となって人間に経験される世界、それが「形而上的経験」である。以上より、第一部では、被造物が「形而上」の实在の「表号」となることによって神やキリストが人間に経験されるという「形而上的経験」が可能となり、实在とのつながりを有した経験的事実として人間の自我に与えられる、ということが内村の「実験」の認識論的基礎であると結論づけた。人間はこうして与えられた「形而上的経験」の「実験」において、实在とつながる「事実」を獲得するのである。

第二部では、(2) (3) (4) の問題に答えるために内村の神学的認識論が論じられた。第三章では、内村の聖書解釈テキストの分析方法を、彼の文学観や聖書観にまでさかのぼって考察した。その結果、言語観や文学観において、内村が外部の实在と言葉との照応関係を問題としていたことが明らかになった。聖書の場合も同様である。聖書はそれ自体では不完全な人間の言葉であるが、現存するキリストという外部の实在との照応関係を介することで、神の言葉としての意味が明らかとなる。また、内村が組織神学のテキストのように様々な聖句をコラージュして使っているという特徴も指摘した。こうして本研究では、内村の聖書解釈テキストの分析方法として、聖句という単位に注目するという方法が提示された。ある一つの聖句について、内村がどのような解釈をしているかを、時系列順に追っていくという手法である。以下、本研究はこの方法を具体的に内村のテキストに適用し内村の思想世界の構造の分析を行った。

第四章では、(2) の問いについて、ヘブライ人への手紙一三章八節とヨハネ黙示録一章八節との解釈が取り上げられた。内村においてヘブライ人への手紙一三章八節は、時空を超越した神的存在者であるキリストが歴史的時間の内部において自己同一性を保持しつつ、人間に経験可能な实在として現われ、「キリストの現象学」と言うべき仕方で直観され得ることを意味する聖句として解釈されたのであった。このキリストの現れという「形而上的経験」によって内村の言う「実験」は可能となる。その際、経験されるキリストは「度」の論理に従って現れ、生きた人格であり、「永生」でもあった。この「形而上的経験」がヨハネ黙示録一章八節によって将来に延長されることによって、聖書の全体的統一性、すなわち終末論的観点から聖書が一つの全体

として解釈可能であることが根拠づけられた。そして、その統一性の内実は神名解釈において明確となるのである。こうして聖書の諸文書は神の啓示のグラデーションという「度」の論理によって啓示の強度という形で連結され、全体的統一性において解釈可能になった。「十字架の事実」は「形而上的経験」と啓示のグラデーションという「度」の論理が背後にあることによって認識可能になっていたのである。

第五章では、(3)の問いと(4)の問いについて、マタイ福音書五章八節とコリント前書一三章一二節とヨハネ第一書三章二節の三つの聖句の解釈が扱われた。まず、「仰瞻」という言葉が内村の中で深い救済論的含蓄をもつようになった過程を分析した。再臨運動直前期になると、それに再臨と「神の顔を見る」という主題とが加わった。「仰瞻」に「神の顔」というモチーフが加わり、「神の顔」を再臨時に見るとされることによって、道徳的な完全性、すなわち聖化や栄化がもたらされると考えられるようになった。これは同時に救済の完成であり、至福直観でもある。現在の終末論と再臨とは、神の顔の明瞭度の違いとして区別されると同時に相互に連続するものと位置づけられている。神の顔を見るという点では現在時も再臨時も同じであるが、神の顔の明瞭度に差異があり、現在時は朦朧でしかないが、再臨時には顔と顔を合わせてはっきりと見ることになる。この明瞭度の違いにより、現在時から始まった救済は再臨時に完成するとされた。ここにも「度」の論理が存在する。こうして義認は、「神の顔」の明瞭度の違いにもかかわらず、「神の顔」を「仰瞻」することを介して、聖化や栄化へとつながっていき、同時に、現世の神認識は、神の顔の明瞭度の違いによって、途上性や未完性をもつのである。

最後に、第六章では、神認識の対象である神そのものを内村がどのように考えていたのかを論じるために内村鑑三の三位一体論が分析された。内村はここで社会的三位一体の考え方を展開しているが、それは「神は愛である」ことの徹底であり、内在的三位一体にせよ経綸的三位一体にせよ、神が人間と関わって救おうとする神であるという前提から導き出されている。その際、聖書の引用、ジョナサン・エドワーズへ言及、人名の引用などについて、内村はEdgarの論文を参考にして論を組み立てていることが明らかになった。それは、内村がアメリカの神学、特に長老派の神学の伝統のなかで思索を展開していることを示している。しかし、内村がEdgarの論に対して付与したり削除したりした箇所を検討によって、内村がEdgarの論文をそのまま日本に持ち込んだわけではないことがわかる。内村は日本人に伝道するという自分の文脈を意識し、その文脈に合うようにEdgarの議論を編集し、削除や付与を施している。内村は、神が愛であり人間の救い主であることを、アメリカのキリスト教の伝統から素材を得つつ、日本人に合うように編集して発表したのである。したがって、内村にとって、神認識の対象となる神は三位一体の神で表現されるような愛の神だったのであり、愛によって人間に働きかけ、人間を罪から救おうとする神だったのである。

終章では、結論として、「形而上的経験」と「度」の論理の二つが内村の神学的認識論の特徴であることが確認された。まず「形而上的経験」については、人間の実際の経験の上に立ち、「詩的観念」や sacrament 論によって表されるような「形而上的経験」が人間の経験のうち事実として存在していると、内村が主張していることを明らかにした。本研究ではこのような宗教経験や「形而上的経験」の経験的事実性の主張は、近代以降のキリスト教弁証論の一つとして考察に値する主張だと結論付けた。むしろ、現存するキリストという外部の实在との照応関係の経験が万人に当てはまるものではない以上、内村の「形而上的経験」の考えに普遍妥当性を主張することはできない。しかし、人間の実際の経験には、理性によって合理的に構成されるものからはみ出る余剰部分があることも事実であり、内村はその余剰部分を外部の实在との照応関係が豊かに含まれる「形而上的経験」として経験し、キリスト教信仰の基礎としたのである。

次に、「度」の論理については、この論理が啓示のグラデーションという形で内村の「形而上的経験」に影響を与えており、さらに神の顔の明瞭度の違いという形で救済論にも影響を与えていることを明らかになった。先行研究では伝統的でオーソドックスなキリスト教だとされてきた内村のキリスト教思想の根底にプロセス神学を思わせるような「度」の論理が潜んでいることが明らかになったのである。結果だけみればオーソドックスという評価を下すしかない内村のキリスト教思想は、その信仰対象をどのように認識したのかという神学的認識論の切り口から見ることによって、内村の宗教世界の背後にある論理を取り出すことができるのである。

以上の各章の議論を通して、本研究では、冒頭に掲げた（１）～（４）の問いに従って、内村のキリスト教思想の基礎というべき神認識について探求が行われ、それによって、神認識から救済までの議論を支え導く論理や考え方が明らかにされた。

(論文審査の結果の要旨)

内村鑑三は日本キリスト教思想史において最も影響力のある著名な思想家の一人であり、その思想内容の解明は、キリスト教研究全般にとって大きな意義を有している。内村の思想的射程は、近代日本の文脈を越えて、西欧近代におけるキリスト教の理解にも及んでいる。たとえば、内村を起点とする無教会キリスト教は、日本の独自のキリスト教であるだけでなく、近代的な世俗世界においてキリスト教がいかにありうるかについて論じる上で、そのモデルケースともなり得るものなのである。こうした事情から、内村研究は世界的な広がりにおいて進められ、非戦論や社会批判を含む広範なテーマにおいて、現在、多くの研究成果が蓄積されている。内村研究には、狭義のキリスト教研究を越える意義があると言わねばならない。

本論文は、内村鑑三の神学思想（神学的認識論）に対して内村の聖書研究からアプローチするという典型的な内村研究の視点を受け継ぎつつも、研究方法を掘りさげることによって、これまでの先行研究を乗り越えようとする大胆かつ意欲的な研究である。本論文は、先行研究を分析し研究方法を論じた「序」と内村の思想的意義を確認し展望した終章以外に、内村の神学思想の内容を論じる4つの章からなる第2部と、神学思想の前提である哲学的認識論を論じる2つの章からなる第1部とによって構成されている。以下、本論文に見出される優れた特徴と成果について、主要なものに絞って説明を行いたい。

まず、強調すべきは本論文の方法論の意義である。内村はライフワークとも言える聖書研究によって、神論、キリスト論、聖霊論といった、キリスト教思想の一連のテーマについて多くの思索を展開したが、その思索の基礎となる認識論については、これまで十分な解明がなされてこなかった。これに対して本論文では、キリスト教思想の諸テーマを分析する第2部に先だって、内村の認識論の基礎に経験論的な哲学思想が存在していることが、「実験」概念に注目することによって詳述されている（第1部第1章）。そこで参照されたのは、ヒュームの認識論、特にその実験概念であり、少ないテキスト上の手がかりから、慎重な議論の積み上げによって、説得的な論が提出された。以上の方法論は、哲学的認識論と形而上学とを扱った第1部が第2部の神学思想の分析に先立って配置される、という論文構成において具体化されている。こうした本論文の独自の的方法論的視点は、内村鑑三についての膨大な先行研究を幅広く検討することによって提出されたものであり、きわめて説得力あるものとなっている。

次に本論文について注目したいのは、やはり方法論に関するものである。本論文第2部では、内村の神学思想の分析が内村の聖書研究テキストに基づいて試みられているが、その際に、分析の基礎単位とされるのは、内村のテキストに見出される複数の聖書聖句の組み合わせ（聖句のコラージュ）であり、この聖句の組み合わせ方と聖句解釈の展開を時系列において追跡するというのが、第2部の方法である。

ここで聖句のコラージュと呼ばれる聖書聖句の組み合わせが示すのは、内村の神学思想を構成する構造的まとまりであり、第2部第4章から第6章までの分析によって、この思想構造の主要なまとまりが明らかにされた。これに対して、聖句のコラージュの時系列における展開が意味するのは、内村の神学思想の形成と発展であり、その議論を導入することによって、現在きわめて精密な分析がなされている内村の伝記的事実と神学思想内容とが有機的に関連づけられることになった。こうして、内村の神学思想はその構造と展開過程の両面から全体として理解することが可能になったのである。

たとえば、第4章では、ヘブライ書13章8節、ヨハネ黙示録1章8節、出エジプト記3章14節という聖句の組み合わせによって、「実験」に基づく「活けるキリスト」の経験が過去、現在、未来を貫く同一の实在として捉えられ、それによって聖書諸文書の統一性が理解可能になることが示された。このうち、活けるキリストの未来に関わる黙示録テキストが聖句のコラージュ内に現れるのは、第1次世界大戦、再臨運動、関東大震災と続く時期であった点に注目することにより、内村の思想展開に対するキリスト再臨運動の意義が明らかになった。

以上は、本論文の特筆すべき方法論的な特徴であるが、方法論の意義はそれがもたらす成果によって評価されねばならない。その点で、特に指摘したいのは、本論文によって、内村のキリスト教思想の背後にある哲学的神学的な思想史的伝統が明らかにされたことである。それは、近世イギリスの経験論哲学と長老派系の神学思想（特にその自然神学）に遡り、イギリスからアメリカへと続くプロテスタント的神学伝統を形成するものであって、内村はそれを継承したと解される。内村から読み取られる思想的伝統は、近代キリスト教思想の形成過程を再構成する上で重要な手がかりとなることが期待される。ここに、本論文のきわめて重要な成果が確認できる。

このように本論文は内村研究を大きく前進させる野心的な研究であるが、改善すべき点も少なくない。たとえば、聖句のコラージュ、天然、啓示のグラデーションといった本論文の重要語句について概念的にいっそうの明確化が必要であり、野心的な議論についても、さらに精密な詰めと掘り下げを要する点が散見される。論文構成についても、再考が必要であろう。しかし、こうした問題点については論者自身よく自覚しており、今後の研鑽において克服することが期待できる。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2018年9月20日、調査委員4名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。